

**子どもたちが今日に満足し、
明日に期待する学校生活の実現を願って
—知的障害養護学校における生活単元学習の取組—**

岐阜県立大垣養護学校	佐々木 千 絵*
	富 田 聰 子
	神 谷 佳代子
	渡 邊 智 美
	大 橋 里 佳
	肥 田 幸 宗
	竹 本 隆 浩
	永 井 久 江
	所 一 隆
特別支援教育専修	坂 本 裕

はじめに

平成19年度から特別支援教育が本格実施となり、その取組の中核のひとつとして学校と福祉、医療、労働等の関係機関との連携が強く求められている。そうしたことから、各種専門家や地域講師などの教師以外の人材が学校教育にこれまで以上に関与・参加することが予測される。このような状況において、教育という専門領域、学校という専門機関、また、教師という専門職が担う役割も一方においてこれまで以上に明確にし、主体的に取り組む構えが重要と思われる。

このことにかかわって太田（2000）は、教育の果たせる役割を「その時期の子どもの主体的な学校生活を、教育ならではの子ども理解と対応によって、本人の本音での思いにそいながら、より充実・発展すること」とし、実践研究の重要性を指摘している。

本稿においては、知的障害養護学校小学部で子どもたちが主体的に活動し、明日を心待ちにする学校生活が実現できるよう、夏に向かう6月から7月に、子どもたちと教師が水遊びで大いに取り組んだ生活単元学習・単元「バジャバジャランド」を報告する。

実践事例：単元「バジャバジャランド」

＜単元の検討＞

本単元は、暑い夏に向かう夏休みの前に、寄宿舎前に設置したウォーターライダーを中心とした遊び場「バジャバジャランド」で、みんなで毎日楽しく遊ぼうというものである。その検討においては、岐阜県特別支援教育 web 研修システム（坂本ら、2006）を使って、大垣養護学校

* 平成18年度12年目研修教員

表1 単元「バジャバジャランド」のTV会議での事前検討

回	月日	参加者	内容	助言
1	5/26	学校：3名 大学：1名	・単元構想	・単元名の付け方 ・場の設定の考え方 ・遊具の考え方
2	6/14	学校：2名 大学：1名	・学習支援案 ・遊具の名称	・前文の書き方 ・願いの設定の仕方 ・単元展開の留意点 ・遊具の名称の付け方
3	6/21	学校：2名 大学：1名	・学習支援案	・授業展開

* 4回目は大学にて行った。

と岐阜大学教育学部をTV会議システムで結んでの表1に示したような3回に渡る事前検討等を行い、子どもたちが自分から自分で大いに遊ぶことのできる遊びの検討や教師の関わり方、授業の展開を表2～4に示した学習支援案としてまとめた。

<研究授業の実施>

7月4日に研究授業を実施し、真夏を思わせるような澄み切った青空の下、写真1、2のように存分に水遊びを楽しむ子どもたちの姿がみられた。

<授業研究会>

○学校長の講評

- ・場の設定や準備が大変であったであろう。
- ・子どもたちが遊びに集中している姿がみられよかった。

○授業者の自評

- ・場所の設定については、遊具をアレンジするだけではなく、子どもの遊ぶ姿を思い浮かべながら、場の準備を行った。
- ・すべり台の高さや傾斜については、子どもの抵抗がない程度にした。
- ・前半「バシャバシャすべり台」をメインに考えた。

○研究討議の概要

参観者1：両側から滑り降りてくることは、はじめは危ないのではと思っていたが、子どもたち自身、始めと今では遊び方などどう違うか。

授業者1：すべり台は、子どもたちが一番すべりやすい角度や水圧にし、すべり落ちる速度などを配慮した。また、それぞれの場所に教師を配置し、絶えず声をかけてきた。

司会者：他の遊具などへ目移りしたりはなかったか。

授業者2：Yさんは大変恐がりで、ひこうき型のジャングルジムに逃げてばかりいたが、今ではシューすべり台が何回もできるようになった。教師と一緒に体験することで遊びの幅が広がったように感じる。

参観者2：大きなすべり台が2台あるにもかかわらず、近辺のおもちゃやスプリンクラーでずっと遊んでいる子はちょっともったいないような気がした。もちろん子ども自身はすごく満足していると思う。

参観者3：どぼん池にセラピーボールを投げ入れた子どもがいたが、それを教師がどけた意図は。子どもはあの場でやりたかったのでは？

表2 単元「バジャバジャランド」学習支援案-1

小学部2年生 「生活単元学習」学習支援案

日 時：	平成18年7月4日 3, 4校時 10:30~11:15
場 所：	宿舎前遊具
授業者：	佐々木千絵(T1) 竹本隆浩(T2) 渡邊智美(T3) 富田聡子(T4) 大橋里佳(T5) 所 一隆(T6) 肥田幸宗(T7) 永井久江(T8) 神谷佳代子(T9)

1. 単元名 「バジャバジャランド」
2. 単元について

本単元は、暑い夏に向かう夏休みの前に、寄宿舎前に設置し、ウォータースライダーを中心とした遊び場「バジャバジャランド」で、みんなで毎日楽しく遊ぼうというものである。

夏はバジャバジャ

水遊びは子どもたちが大好きな活動の一つであり、6月の前半の単元「泥遊び」でも、バケツに水を汲んでは砂にかけて楽しんだり、水を張ったシートの上で手足で水を叩いてはねを楽しんだりする姿がたくさんみられた。

そんな子どもたちと教師が一緒になって、日に日に暑くなるこの時期に、子どもたちが日常よく遊ぶ寄宿舎前の遊び場を、ウォータースライダーや周りに溝がある「バジャバジャランド」に変身させ、よりダイナミックに、みんなで思いっきり楽しく遊びたいと考えた。

とことんバジャバジャ

遊び場の中央に「ドボン池」を作り、その池の両側から固定遊具を使ったひとりで滑る「シュー滑り台」と先生お手製のみんなで滑る「バジャバジャ滑り台」を配置し、みんなが大好きなウォータースライダ

ーで思いっきりとバジャバジャと水しぶきを上げながら楽しむことができるようにした。

その周りには、もっとバジャバジャになるように上から水しぶきが降り続ける「シャワシャワ」ビニールプールの「ポトーン池」や、セラピーボール等を流して遊ぶ「スルススライダー」も配置し、それぞれがお気に入りの水遊びをバジャバジャとできるようにした。

毎日バジャバジャ

単元初日から「バジャバジャランド」が楽しい、また遊びたいという思いが持てるように、「シュー滑り台」「バジャバジャ滑り台」「ドボン池」「シャワシャワ」を設置しておく。そして、子どもたちの遊びの様子を見て工夫・改善を図り、「ポトーン池」や「スルススライダー」などの遊具を増やしていくようにする。

こんな楽しい遊具の中で、小雨でも活動を取り組み、毎日思いっきり遊んで、自分の気に入った遊具を見つけ、またいろいろな遊具で思う存分バジャバジャと遊んでほしい。

みんなでバジャバジャ

「バジャバジャ滑り台」を滑り終えたら、また階段を昇って滑べるように「ドボン池」側に階段を配置したり、友だちや教師と並んで滑ったり、手をつないで滑ったりができるように滑り台の幅を工夫したりすることで、遊び全体に流れや勢いをつけるようにする。

また、それらの遊具は、浅瀬の水遊びができるように溝を掘った「ピチャピチャ川」をつないでおき、バジャバジャと水の中から出ることなく遊んで回ることができるようにした。

さらに、友だちや教師の遊んでいる様子がどこからでも見られるように遊具の配置場所にも工夫をすることで、多く的人数で遊ぶことが苦手な子どもも、友だちや教師と一緒に遊ぶことの楽しさを味わいつつ、時間中存分に遊ぶ姿を見せてほしい。

- 3 単元におけるねがい

- ・「バジャバジャランド」のいろいろな遊具で、みんなで思いっきり水遊びを楽しんでほしい。

表3 単元「バジャバジャランド」学習支援案-2

4 単元の計画

○単元を立てるにあたって

- (1) みんなで思いっきり遊ぶために
- ・学校での生活が「バジャバジャランド」一色になるように、小雨でも遊び、毎日の生活に流れができるようにする。
 - ・「バジャバジャランド」への期待がより強くなるように、毎日自宅から水着を持参するようにする。
 - ・「バジャバジャランド」で遊びたい気持ちがより強くなるように、登校後に子どもたちと教師と一緒に水溜などの準備をする。
 - ・子どもたちが自然に「バジャバジャランド」の中央に集まるように、「ドボン池」を中心にいろいろな遊具を設置し、「ピチャピチャ川」でつながるようにする。
 - ・単元初日からお気に入りの遊びとなるよう、「バジャバジャ滑り台」「シュー滑り台」「ドボン池」「シャワシャワ」「ピチャピチャ川」は設置しておく。
 - ・「バジャバジャランド」での遊びが大いに盛り上がるように、教師も共に遊びながら、一緒に歓声をあげたり、遊びに誘ったりする。
 - ・友だちや教師と一緒に並んで滑って遊べるように、「バジャバジャ滑り台」は幅広く設置し、斜行角度をゆるやかにしておく。
 - ・「バジャバジャ滑り台」を滑り終わったら、また階段を昇って滑ることができるように、「ドボン池」から直行できる階段を滑り台の両脇に配置する。
 - ・「バジャバジャランド」での遊びが盛り上がるように、BGM「ひょっこりひょうたん島」を流しておく。
- (2) それぞれが思う存分遊ぶために
- ・どの子どもも「バジャバジャランド」で遊ぶことができるように、これまでの子どもたちの遊びの様子を参考にしながら遊具を用意する。
 - ・「バジャバジャランド」での遊びに勢いがつくように、着替えなどの準備ができた者から順次遊び始めるようにする。
 - ・「バジャバジャランド」での遊びを自分から満足して終わることができるように、終わりの時間が近づいたらBGMを替えたり、教師が片付けに誘ったりする。

○単元計画

月/日	曜	主な活動	関連する活動	
6/19	月	「バジャバジャランド」で遊ぶ 「ドボン池」 「シュー滑り台」 「バジャバジャ滑り台」 「シャワシャワ」 「ピチャピチャ川」		
20	火			
21	水			
22	木			
23	金			
26	月			
27	火			
28	水			
29	木			
30	金			
7/3	月	「バジャバジャ」 「クルクル」 「ポトン池」 「スルススライダー」	三城プール	
4	火			本時
5	水			
6	木			
7	金			
10	月			
11	火			保護者と遊ぶ
12	水			
13	木			三城プール
14	金			
18	火	三城プール		
19	水			



写真1 研究授業(バジャバジャ滑り台)



写真2 研究授業(スルススライダー)

授業者1：セラピーボールはするするスライダーで使うものであり、あの場に入れたままにしておくと危険がある場合がある。彼には他の遊びをしてほしかった。するするスライダーは水がやや怖い子がそこからすべり台につなげていくように設定している。

授業者3：バシャバシャすべり台の上にいる。危なくないように回りを見ながら、下にいる授業者4に合図を送ってからすべらせるようにしていた。極力危険が回避できるように教師を配置したが、子どもの方にも少しずつ意識が出てきた。「3・2・1」とカウントダウンするとニコッと笑う姿もみられるようになった。

授業者5：シューすべり台の上にいる。はじめはスピード感があって怖いのか、子どもたちはあまりすべらなかつた。今日はなぜか多かつた。待ち時間の過ごし方を工夫していった。「3・2・1」のルールがわかつてきた。バシャバシャすべり台とシューすべり台を交互に楽しむ子どももいた。

授業者6：バシャバシャ、シャワシャワのところにいる。少し水流は弱めにした。子どもが自分から選んできている。中には感触を楽しむ子どももいる。

参観者4：子どもたちが本当にいきいきと活動している。遊びながら他の友だちを意識するように、内に向かって設定されているのがよい。子どもが自ら主体的に動いている。水遊びを通して、どんな変化をしていったか。

参観者5：3組のMさんはずっとバシャバシャで過ごしていた。すべり台は好きではないが誘われたら遊ぶ子ども、水たまりほどの水をたたく子ども、水に口をもっていく子どもなど、様々である。遊びとしては個々で、遊具によって中央に集まる動きにより、集団を意識する。

遊びを通して少しずつ遊び方がかわっていった。

司会者：主に自閉症児のことを考え、待ちを少なくするために、始めのあいさつや終わりの挨拶を設定しなかった。

参観者6：3年生もぜひこの場で遊ばせてやりたい。一人一人が本当に自分の好きな場所で遊ぶことができるとよい。

授業者6：2組の3Sさんは普段は水遊びは大好きである。嫌がったのは今日が初めて。たくさん参観者があって不安定だったかもしれない。「もう嫌だ。帰る。」と言いつつも、教室の方へ行くわけではなかった。

参観者7：みんな一人一人が楽しそうだった。すべり台が多いかと思ったが、意外にシャワシャワでずっと遊んでいる子もいた。

参観者8：自分で遊びを選ぶ。いろんな遊具を回っている子がいれば、一つを何度も繰り返している子もいた。「この子にはこんなことを」という願いの基に今後も場所を増やしていくのか。

参観者9：子どもたちは自分のお気に入りの遊具が決まっていたように思う。遊びの中で教師からの働きかけで、教師と関わることはできるが、友だち同士が関わることは難しいと感じた。するするスライダーのようなおもちゃを介して関わりが広がるとよい。

参観者5：単元計画の立て方や考え方で、何を意識して何を大事にしていくとよいのか。

授業者1：6月は単元「中庭で遊ぼう」で、6月はどんな生活をしようかというところからスタートした。6月は水はまだ早いので、泥遊びにした。泥遊びの時の様子からスタートした。「これは大切にしたい」というものを「子どもが楽しい生活は何なのか」として考えた。

参観者10：「楽しい」の中味は何か？スピード感なのか水温なのか。すべり台に一人で登ったのか教師の言葉かけで登ったのか。自転車の単元で言うと「まっすぐ走ろう」から「少し曲がってみよう」のように課題を設けることもあるのではないかと考える。子どもも課題を意識し、意識することでできたときには達成感があるのではないかと考える。「遊ぶ」「楽しい」「よかった」だけで終わってはならないのではないかと考える。

司会者：課題に迫るといふよりは、その前段階の思う存分十分に活動することを大切にしたい。

授業者5：同じ遊びを繰り返しているうちに、「今度はこんなふうに」というように願いが出てくる。駒切れではなく、同じ活動を少しずつ変化させながら続けていくことが大切と考える。

○共同実践者の助言

- ・子どもたちの口から「バシャバシャ行きたい」という言葉が出ていることが成功の証拠と思う。
- ・子どもが自分から遊びを選び、自分からスタートしていく姿が大切である。
- ・小さな学校では1～6年までみんなで一緒に遊ぶ。そうすると自然に子どもの中に役割が生まれ、リードしたり誘ったりと広がっていく。同学年での遊びはリードする者がいないので難しいところがある。
- ・単元名は、その単元で何がやりたいのかがストレートにイメージできるものであること。キーワード的であること。教師がイメージできなければ当然子どもにもイメージできない。
- ・単元の内容は季節性があるとよい。なぜ今やるのか、今しかできないから、今だからやる。子どもたちが肌で感じるができることこそ大切となる。

- ・単元を仕組むには、新規性と馴染み性をどのようにからめ合わせていくかが大切となる。今日も明日も安心して取り組むことができること（馴染み性）、しかしいつも同じではないこと（新規性）のバランスを考える。
- ・集団化と個別化のさじ加減が大切。必ずしもあいさつをしてはじめてなくても準備ができた者からはじめることがあってもよいのではないかと考える。やりたいという欲求を大事にし、思う存分取り組むことを最大限に生かす。大好きなことの中であれば我慢することができる。自分が大好きなことなら待てる。（ディズニーランドの乗り物なら待てる）
- ・存分に遊んでいれば十分である。導入、展開、まとめにとらわれなくてもよい。
- ・とにかく「学校に来たい」と子どもが願う生活にしていくことが教師の仕事である。
- ・今何をやれば子どもたちにとってよい生活になるのかを絶えず考えるようにしてほしい。
- ・学習支援案は必須である。ねがいでだけでは不十分であり、手だてが浮かんでこそ実現できる。その手だてを引き継いでいくことが重要となる。
- ・生活全体を子どもに分かりやすい生活にしていくことが大切である。ダイナミックに「明日も先生とこれをやりたいなあ」と思うような活動を仕組んでいく。

おわりに

朝、学校に登校するとすぐに着替えて、ジャバジャバランドの水溜に走る子どもたち。大きなすべり台で繰り返し繰り返し遊ぶ子どもたち。自分のお気に入り遊具で時間を忘れたように没頭して遊ぶ子どもたち。そんな子どもたちの学校での生活を心待ちにし、存分に楽しむ子どもたちの姿は教師冥利に尽きるものであった。

子どもたちが今日に満足し、明日に期待する学校生活の創造し、実現することが特別支援学校の教員の専門性と捉え、これからも研鑽に努めていきたい。

付記

本論文における事例経過、写真の掲載等は保護者の了解を得ている。

文献

太田俊己（2000）教育の主体性・教師の主体性、発達遅れと教育、509、30-33。

坂本 裕・谷崎 毅・三牧孝至・池谷尚剛・廣 遼 忍・平澤紀子・神野幸雄（2006）特別支援教育に携わる教員の専門性向上のためのテレビ会議システムを活用したオンサイト研修の検討（1）、岐阜大学カリキュラム開発研究、24（1）、16-20。